

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(27)集

緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

Minami tanba site

南丹波遺跡

1998年3月

指宿市教育委員会

序 文

本書は、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡の西側近接地に所在する南丹波遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

平成 6 年度、および平成 9 年度の調査によって、橋牟礼川遺跡と同様の文化層の堆積が確認され、古墳時代から縄文時代に至る遺構群が検出されました。

特に古墳時代においては、橋牟礼川遺跡から続く集落の縁辺を確認することができ、その西側への広がりの一端を把握することができました。

また、縄文時代においても柱穴群が検出され、集落の存在が示唆されるとともに、当時の海岸線がどのあたりまで現在の陸地に入り込んでいたのか検討すべき課題も提出されました。

橋牟礼川遺跡周辺の遺跡の状況が把握されることで、この地域の古代の様相が徐々に明らかになってまいりました。

本書が皆様に活用され、将来に守り伝えられるべき遺跡の保存に役立てられることを願ってやみません。この調査にご指導、ご協力を頂きました関係各位、ならびに地元の皆様に対し心から感謝申し上げ、序文にかえさせて頂きます。

平成10年 3月

指宿市教育委員会

教育長 山下 隼雄

例　言

1. 本書は、平成6年7月1日から平成6年11月10日、並びに平成9年4月11日から同年同月27日まで実施した鹿児島県指宿市に所在する南丹波遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、指宿市教育委員会が実施し、下山　覚、中摩　浩太郎、渡部徹也、鎌田洋昭が担当した。各調査の原図・製図作成者については、目次に記す。編集・執筆は渡部徹也が担当し、製図作業において、前田恵子、清　秀子、上高原聰の協力を得た。
3. 本書のレベルはすべて絶対高である。また、図中に用いられている座標値は国土座標系第IX系に準ずる。
4. 本書の層位・遺物の色調名、破片形状表記基準、含有物の占有面積表記基準は、「標準土色帖」1990年版に基づく。
5. 遺物観察表、遺物実測図の表記凡例は「橋牟礼川遺跡III」(1992)に準ずる。観察表の特殊な表記については、下記の通りである。
土器残存・法量【口:口縁部径、肩:肩部最大径、胴:胴部最大径、底:底部径】
色調【外:外面、内:内面、肉:器肉】
混和材【カ:角閃石、セ:石英、白:白色粒、黒:黒色粒、赤:赤色粒、金:金雲母】
調整【内:内面、外:外面、口唇:口唇部、突:突帯部、底:底面、脚内:脚台内面、脚端:脚台接地面】
6. 本文中の注については、第V章の後にまとめて掲載した。
7. 調査で得たすべての成果については、指宿市考古博物館「時遊館C O C C O はしむれ」でこれを保存・活用している。

本文目次

第Ⅰ章	遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ章	発掘調査の経緯	2
第Ⅲ章	遺跡の層位	5
第Ⅳ章	発掘調査	6
第Ⅴ章	横半礼川遺跡範囲確認調査成果のまとめ	25

挿図目次

第1図	調査地点位置図1（◎渡部）	1
第2図	調査地点位置図2（同上）	3
第3図	調査地点位置図3（同上）	4
第4図	層位模式柱状図（同上）	5
第5図	1 トレンチ北壁層位断面図（ $s = 1/20$ ）（◎鎌田・中摩、◎渡部）	7-8
第6図	調査区西壁層位断面及び試掘トレンチ層位断面図（ $s = 1/20$ ）（◎鎌田、◎渡部）	9-10
第7図	古墳時代硬化面検出状況図（ $s = 1/20$ ）（◎埋蔵文化財サポートシステム、◎渡部）	11
第8図	古墳時代ピット検出状況図（ $s = 1/100$ ）（◎渡部、◎渡部）	13
第9図	弥生・縄文時代ピット検出状況図（ $s = 1/100$ ） （◎埋蔵文化財サポートシステム、◎渡部）	13
第10図	古墳時代ピット平面図・断面図（ $s = 1/20$ ）（◎渡部、◎渡部）	14
第11図	弥生・縄文時代ピット平面図・断面図①（ $s = 1/20$ ）（◎中摩・鎌田、◎渡部）	15
第12図	弥生・縄文時代ピット平面図・断面図②（ $s = 1/20$ ）（同上）	16
第13図	2 トレンチ平面図・北壁層位断面図（ $s = 1/20$ ）（◎渡部、◎渡部）	17
第14図	3 トレンチ北壁層位断面図（ $s = 1/20$ ）（同上）	18
第15図	奈良～平安時代ピット検出状況図・平面図及び断面図（ $s = 1/25, 1/20$ ）（同上）	19
第16図	3 トレンチ遺物分布状況図（ $s = 1/25$ ）（◎埋蔵文化財サポートシステム、◎渡部）	20
第17図	出土遺物実測図①（ $s = 1/3$ ）（◎渡部、◎渡部）	21
第18図	出土遺物実測図②（ $s = 1/3$ ）（同上）	22
第19図	出土遺物実測図③（ $s = 1/3$ ）（同上）	23
第20図	出土遺物実測図④（ $s = 1/3$ ）（同上）	24
第21図	出土遺物実測図⑤（ $s = 1/3$ ）（同上）	24

表目次

表1	土壤硬度測定データ表	11
表2	古墳時代ピット法量表	12
表3	弥生時代ピット法量表	12
表4	縄文時代ピット法量表	12
表5	遺物観察表1	24
表6	遺物観察表2	25
表7	遺物観察表3	26

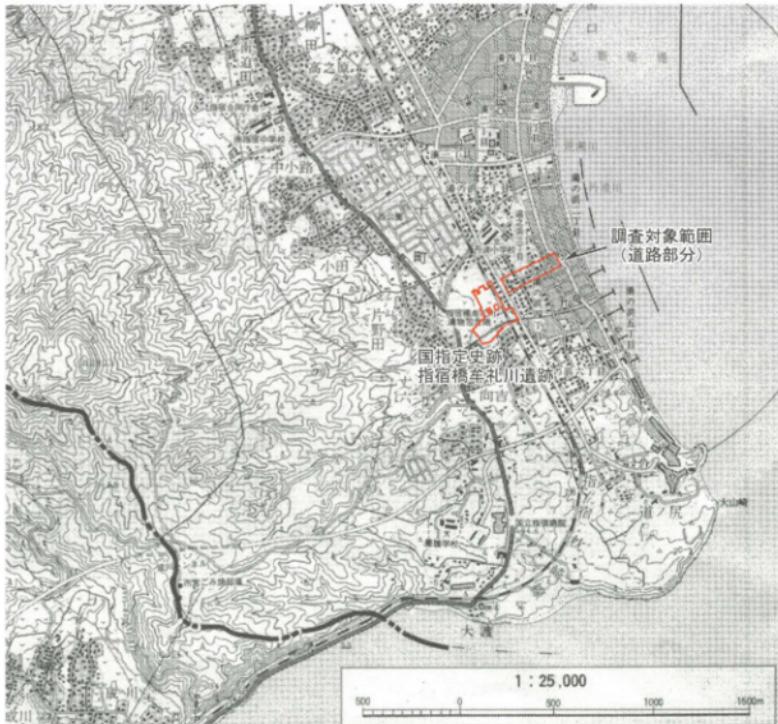
写 真 図 版 目 次

PL. 1	遺跡の遠景①	29
PL. 2	調査地点の遠景	29
PL. 3	第1トレンチの全景	30
PL. 4	第1トレンチの調査風景	30
PL. 5	第1トレンチの地層①	30
PL. 6	第1トレンチの地層②	31
PL. 7	第1トレンチの地層③	31
PL. 8	硬化面1の検出状況	31
PL. 9	硬化面2の検出状況	32
PL. 10	古墳時代ピット群の平面検出状況	32
PL. 11	弥生時代、縄文時代ピット群の平面検出状況	32
PL. 12	第3トレンチの位置	33
PL. 13	874年3月25日の地表面（紫コラ火山灰直下の状況）	33
PL. 14	青コラ上面で検出した奈良～平安時代のピット群	33
PL. 15	青コラ上面で検出した奈良～平安時代のピット群断面	34
PL. 16	遺物出土状況	34
PL. 17	遺物写真①	35
PL. 18	遺物写真②	36
PL. 19	遺物写真③	37

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

南丹波遺跡は、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡の西側隣接地、指宿市十二町湯の浜に位置する。遺跡は、山裾から海岸に向けて緩やかに傾斜する海拔10m前後の火山性扇状地上に立地し、現在は市街地の一角をなす住宅地となっている。

南丹波遺跡は、昭和27年に発行された「南薩民俗第1号」に指宿地方の新発見遺跡として掲載されその存在が知られるようになった¹⁾。丹波小学校南側の字小牟礼原からは、成川式土器や石器、繩文土器などに加え、魚の骨格が描かれた軽石製加工品が採集されている²⁾。また、昭和30年代には指宿高校郷土研究部による発掘調査も実施され、多量の成川式土器が発見されている³⁾。平成5年度には、橋牟礼川遺跡の範囲確認調査の一環として、南丹波遺跡地内で2箇所のトレンチが設定され、確認調査が行なわれた（第2図中⑧、⑨の地点）。その結果、奈良～平安時代の道跡や古墳時代のピット等が確認され、橋牟礼川遺跡で検出された集落の東側の縁辺部の一端が明らかになった⁴⁾。なお、本報告では、これまで小牟礼原遺跡⁵⁾、丹波小学校校庭遺跡⁶⁾として指宿市誌に掲載されていたものも南丹波遺跡に包括している。周辺には、古墳時代の土壙墓群が発見された南摺ヶ浜遺跡や弥生時代終末～古墳時代頃の祭祀遺構が検出された向吉遺跡等があり、南丹波遺跡の性格もこれら一連の遺跡との関係の中で検討していく必要があろう。



第1図 調査地点位置図1(S=1/25000)

第Ⅱ章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

平成4年5月1日、緊急地方道路整備事業の一環として、市道である通称「丈六・摺ヶ浜線」道路拡幅工事を計画しているとの連絡が市都市計画課より教育委員会に入った。同地は周知の遺跡地であるため、事前に発掘調査が必要との旨を回答し、協議をもった。道路の南側は、既に上下水道管や温泉管の埋設時に土の入れ替えが行なわれ包含層が失われていることから、北側部分について調査を実施することで合意、拡幅事業に伴う用地買収の状況から発掘調査は、平成6年度、及び平成9年度に実施することになった。

第2節 発掘調査の組織

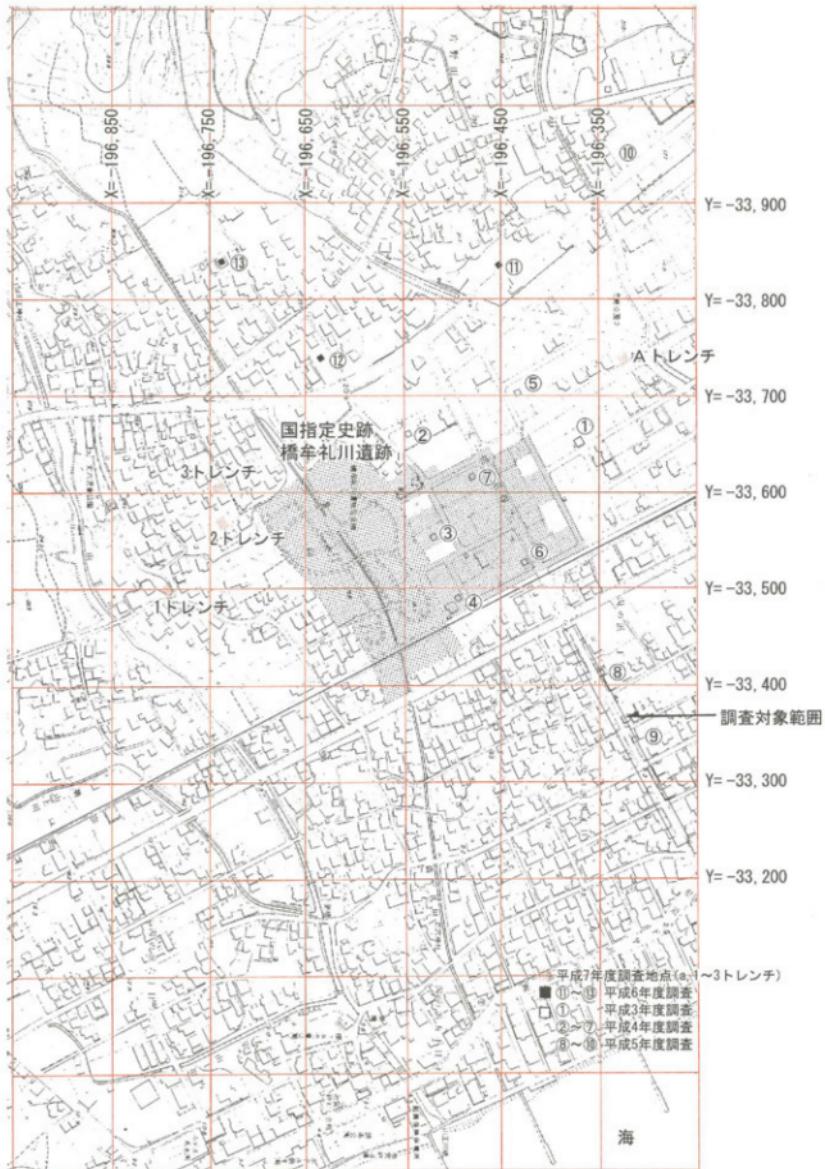
調査の組織は以下のとおりである。

平成6年度 発掘調査責任者	指宿市教育委員会	教 育 長	中村 利廣
発掘調査担当	指宿市教育委員会	社会教育課長	山部 郁夫
		社会教育係長	尾辻 隆
		派遣社会教育主事	塩入 俊實
		社会教育係主事	宮原 智子
		社会教育係主事補	坂元 一博
		文化係長	久保憲一郎
		文化係主査	大久保正一
発掘調査員	文化係主事 下山 寛、同主事 中摩浩太郎、同主事 渡部徹也、同主事 勝田洋昭		
発掘調査作業員	浜崎いち子、井上ヒサ子、東 富子、林山イネ、竹下カツエ、吉元トシエ、新小田千恵子、安留和子、渡瀬ヤナギ、吉元アヤコ、吉元キヨコ、阿久根ノリ子、吉留紀代子		
整理作業員	徳留逸子、前田恵子、清 秀子、新小田香代子、上高原信子		
現地指導	森脇 広（鹿児島大学法文学部教授）		
平成9年度 発掘調査責任者	指宿市教育委員会	教 育 長	山下 雄雄
発掘調査担当	指宿市教育委員会	社会教育課長	室屋 昭男
		社会教育係長	尾辻 隆
		派遣社会教育主事	原口 芳
		社会教育係主査	川畑 忠晴
		社会教育係主査	宮原 智子
		文化係長	下玉利 泉
		文化係主査	小村 寛志
		文化係主査	大道 裕子
発掘調査員	文化係主事 下山 寛、同主事 中摩浩太郎、同主事 渡部徹也、同主事 勝田洋昭		
発掘調査作業員	浜崎いち子、井上ヒサ子、東 富子、林山イネ、竹下カツエ、吉元トシエ		
整理作業員	徳留逸子、前田恵子、清秀子、新小田香代子、上高原信子		

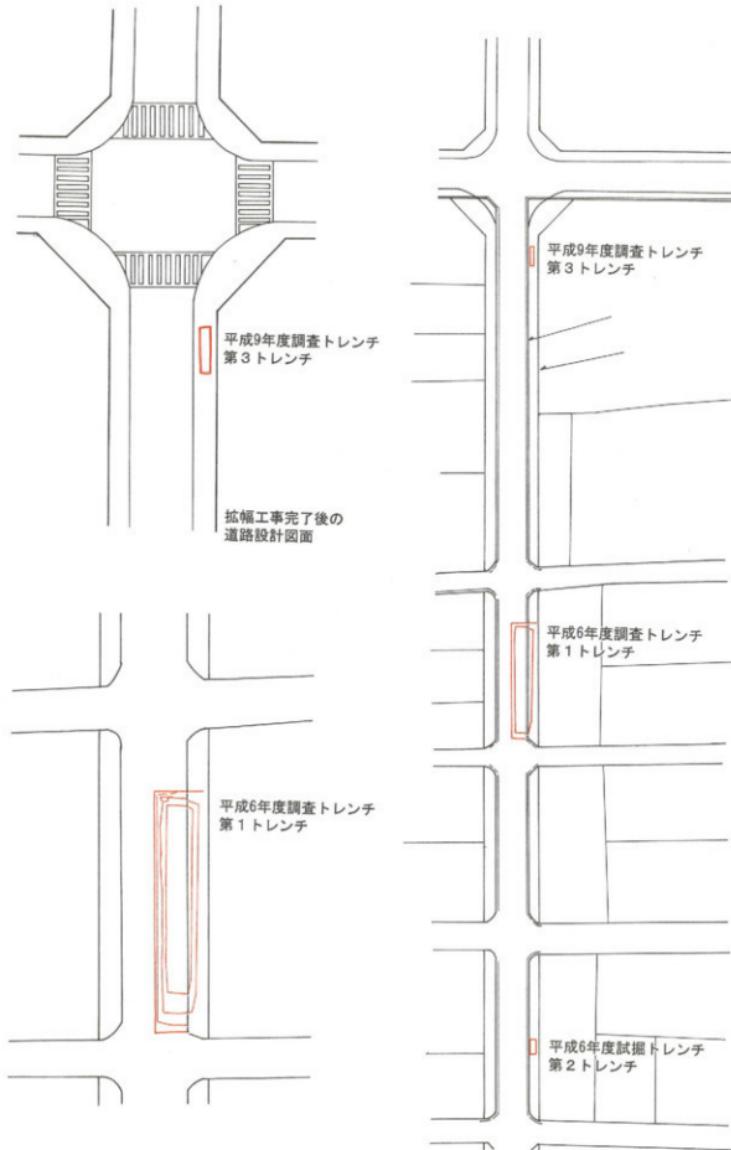
第3節 発掘調査の概要

平成6年度の調査は、丈六・摺ヶ浜線のほぼ中央に5×27mの第1トレレンチを設定し、迂回路を表示した上でこの区間を車両通行止めにして行なった。第1トレレンチからは、古墳時代のピット群、道跡、縄文時代後期のピット等の遺構や弥生時代から古墳時代の遺物が出土した。また、一部、試掘トレレンチを設け、縄文後期の地層の堆積状況を確認した。第1トレレンチの東約70mの地点に設定した第2トレレンチでは、遺構・遺物の出土は見られなかった。このため、記録保存後、第1トレレンチより東側については拡幅工事が実施された。

丈六・摺ヶ浜線は、JR指宿駅前を走る丹波校上通線を横断し、国道226号線に直結する摺ヶ浜地区の幹線道路であり交通量も多い。全面通行止めにして調査を実施することは不可能であったため、平



第2図 調査地点位置図2 (S=1/5000)



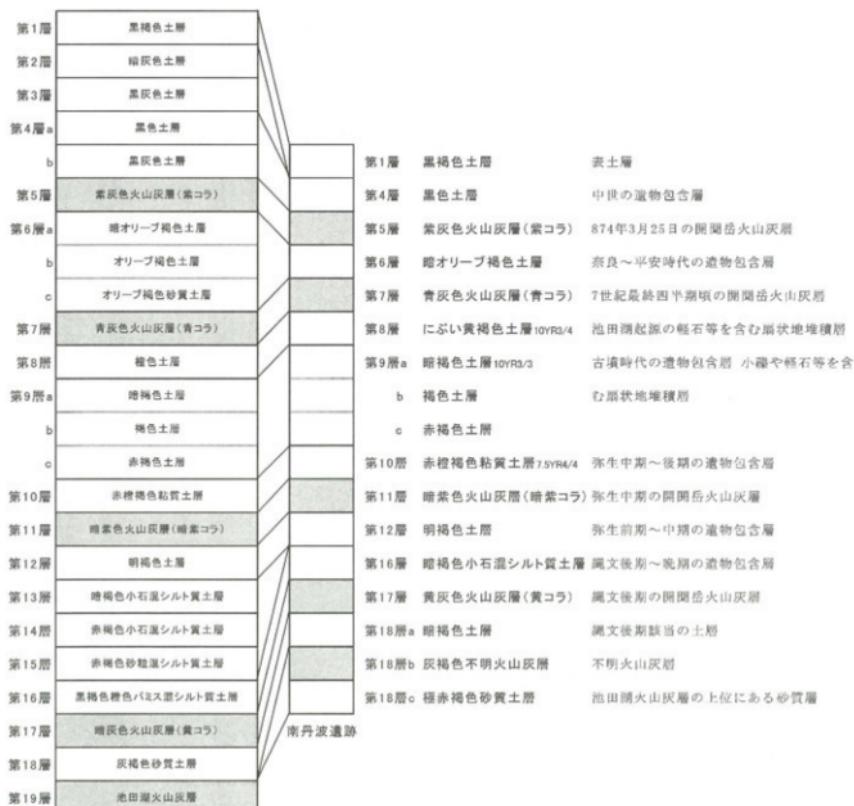
第3図 調査地点位置図3 (S=1/5000)

成6年度の調査成果、並びに平成5年度の確認調査の成果を鑑みた上で、平成9年度は、丹波校上通線と丈六・摺ケ浜線の交差点付近に 1.5×5 mの第3トレンチを設け調査を実施した。その結果、7世紀第4四半期の開聞岳火山灰の上面で杭状のピットを確認した他、古墳時代の遺物の出土が若干みられたが、遺構・遺物の密度は薄い状況であった。記録保存後は、拡幅に伴う掘削時に立工事立会いを実施した。

第Ⅲ章 遺跡の層位

第1節 層位の概要

南丹波遺跡の層位は、基本的には橋牟礼川遺跡の層位と同一であるが、橋牟礼川遺跡では確認されていない縄文時代晚期の開聞岳火山灰が比較的安定して堆積している。下図にその対応関係を記す。



第4図 層位模式柱状図

第2節 第1トレンチの層位

（1）北壁・西壁層位断面

第1トレンチの北壁、及び西壁の層位断面を記録、図化した。第1トレンチでは、第1層～第18層までを確認した。第9層の上面が山手から海岸（北西から南東方向）に向けて傾斜しており、概ねその傾斜に沿って9層以降の各層が堆積している。第5層は西側ほど層厚が厚く、トレンチ西端では1mを超える。直下の第6層は、層厚が厚く、途切れる部分もある。第7層も安定して堆積しており、最下部にはスコリアが見られる。調査区西端では、第8層を挟んで再びスコリアの堆積が見られるが、これは、青コラの前期ステージの噴火に伴うものである^⑦。このスコリア層は西壁では見られないことから、ブロック状に堆積していると思われる。西壁面では、第8層から掘り込まれたピットを1基確認した。第9層は古墳時代該当層であり、場所によっては色調の違いから細分が可能である。なお、北壁面で2基、西壁面で1基のピットを確認した他、成川式土器等の遺物も出土した。第11層は傾斜の大きくなる調査区の中程から見られ10cm前後の層厚で旧地表を覆っている。第17層の黄コラも若干海に向かい傾斜して堆積しているが、上位層に比べるとより水平に近い。層厚は20cm前後で固結している。

（2）試掘トレンチ層位断面

第1トレンチの中央付近に試掘トレンチを設け、黄コラ以前の縄文時代該当層の堆積状況を確認した。第18層は砂層であるが、ほぼ水平に堆積している。試掘箇所は、現在の海岸まで直線距離で約200mの地点である。指宿地方の縄文後期の海進の状況を知る上で、この砂層堆積が、海砂であるのか川砂であるのかが重要な問題となつたため^⑧、鹿児島大学法文学部の森脇広教授に現地指導を受け、堆積層の中に貝が見られないことから河川堆積物の可能性が高いとのコメントをいただいた。

第IV章 発掘調査

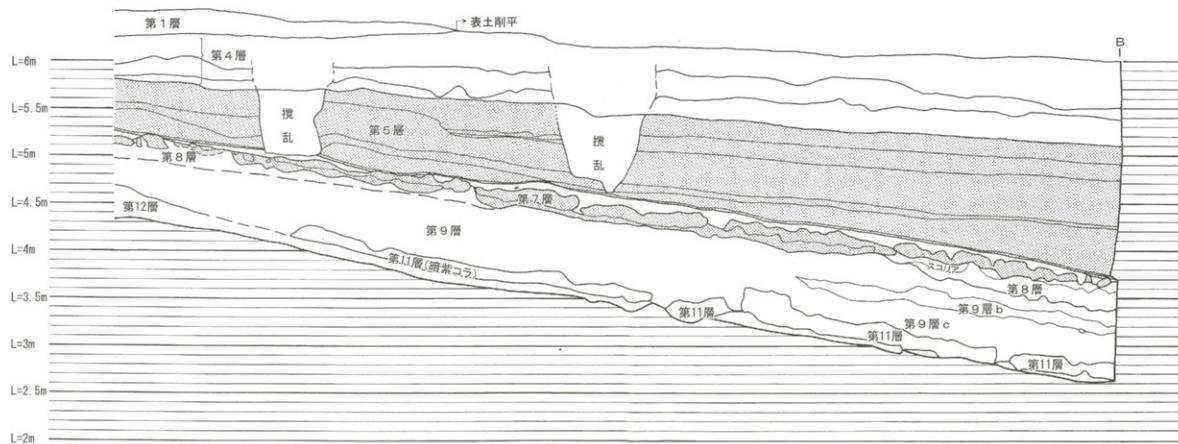
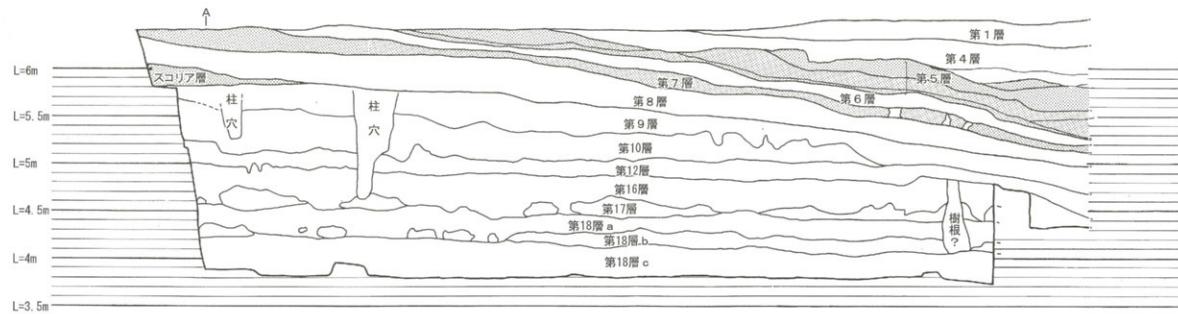
第1節 第1トレンチの遺構

（1）古墳時代の硬化面

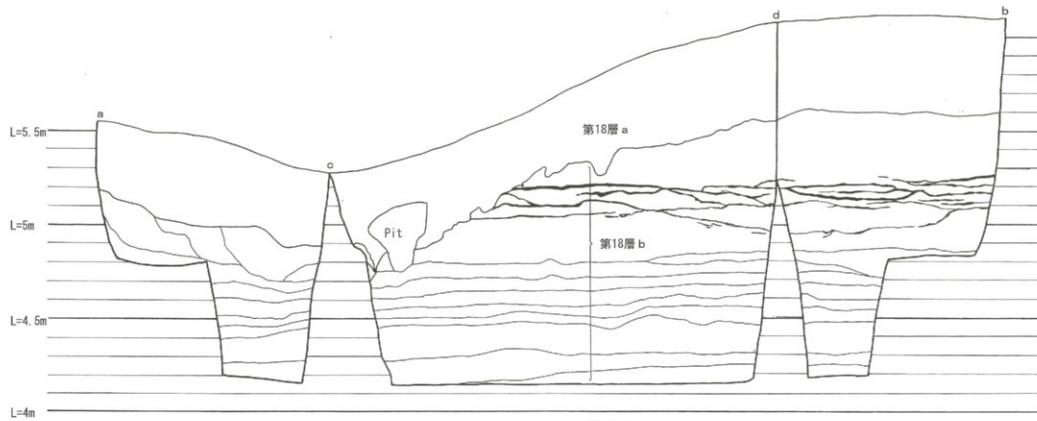
第9層上面で、2箇所の硬化面を確認した。いずれも部分的なもので調査区外に続くものと推測される。

橋牟礼川遺跡では、同時期の道跡が検出されている。経験的には、道跡の硬化面に類似するものと考えられたため、山中式土壤硬度計を用いて土壤硬度試験を実施した^⑨。測定方法は、硬化面と硬化面以外の部分が入るように無作為に50×100cmのグリッドを設定し、10cmメッシュ中3点を計測、硬化面と認識した範囲と、硬化していないと認識した部分について、それぞれ平均値を出し、支持強度P値に換算した。

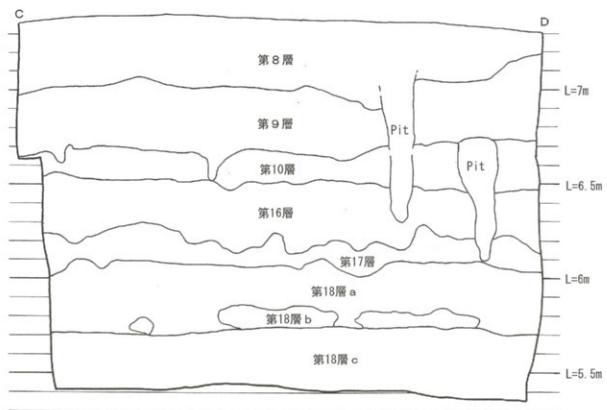
その結果、硬化面1では、約13.97kg/cm²の値を、周辺部については約11.79kg/cm²の値を得た。また、硬化面2では、約18.29kg/cm²の値を、周辺部については約11.79kg/cm²の値を得、やはり、硬化面が周辺より硬いことを確認した。橋牟礼川遺跡で検出されている同時期の路面の硬度もほぼ同程度である。部分的な検出のため断定はできないが、道跡の可能性も棄却できないものとして報告しておきたい。



第5図 1トレンチ北壁層位断面図 (S=1/20)

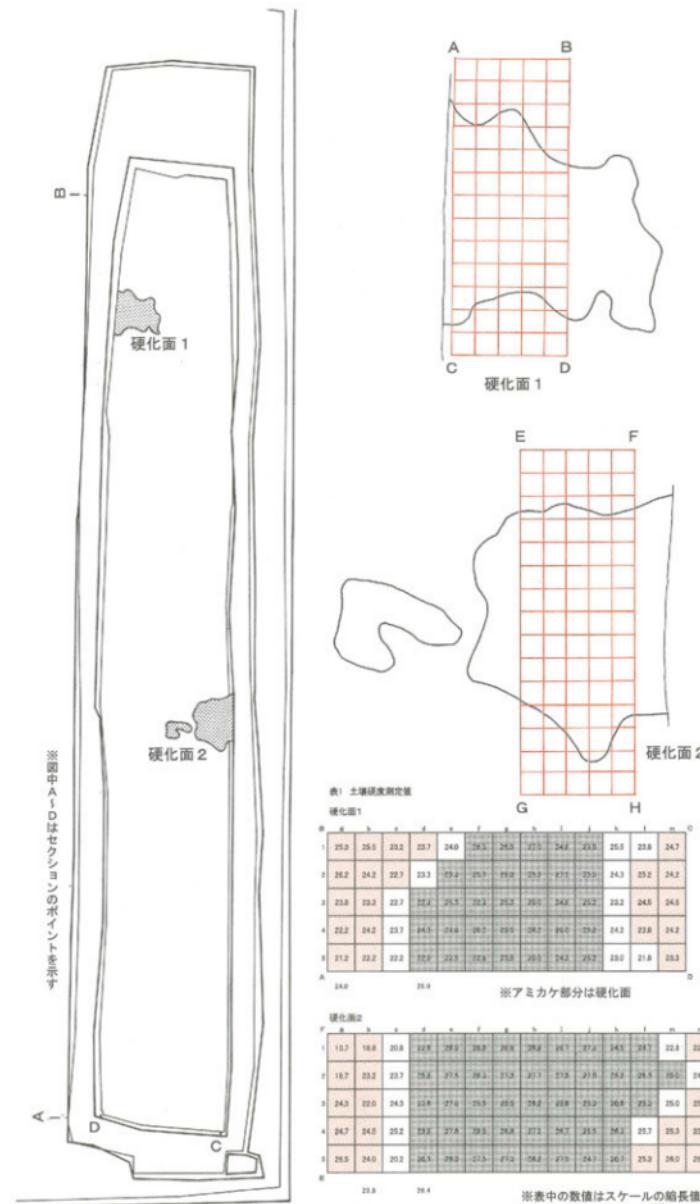


試掘トレンチ層位断面



調査区西壁層位断面

第6図 調査区西壁及び試掘トレンチ層位断面図(S=1/20)



第7図 古墳時代硬化面検出状況図 (S=1/20)

(2) 古墳時代のピット群

第13層上面で、第7層を埋土とするピットを13基確認した。なお、調査区の壁面で3基（北壁で2基、西壁で1基）確認したため、合計16基のピットを確認できた。ピットはいずれも旧地形が比較的平坦な西側に集中している。プランを認識できる並びはこの範囲では確認できなかった。個々のピットの法量については表2の通りである。

表2 古墳時代ピット法量表(cm)

No	長径	短径	深さ	No	長径	短径	深さ
1	16	13.5	11.5	8	20	19	17
2	21	18	24.5	9	12	8	8
3	21.5	17.5	29	10	20	20	26
4	20	19.5	14.5	11	16	16	16
5	29	15+ α	69	12	20	17	21
6	37	29.5	18	13	24	22	16
7	36	22	23				

(3) 弥生時代のピット群

第13層上面で、第10層を埋土とするピットを18基確認した。ピットはいずれも旧地形が比較的平坦な西側に集中している。プランを認識できる並びはこの範囲では確認できなかった。個々のピットの法量については表3の通りである。

表3 弥生時代ピット法量表(cm)

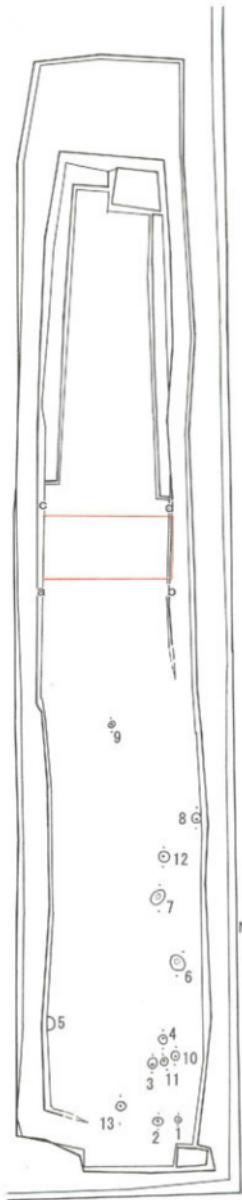
No	長径	短径	深さ	No	長径	短径	深さ
1	19	18	32.5	10	22	20	16
2	19	16.5	54	11	27	21	14
3	18	14	21	12	21.5	20	24
4	14	12	11	13	20	20	15
5	26	23.5	69	14	34	23	45
6	12	5+ α	63.5	15	27	20	16
7	21	16	17	16	19	16	13
8	18	16	5	17	17	6+ α	51
9	26	24	15	18	12	10	47

(4) 縄文時代のピット群

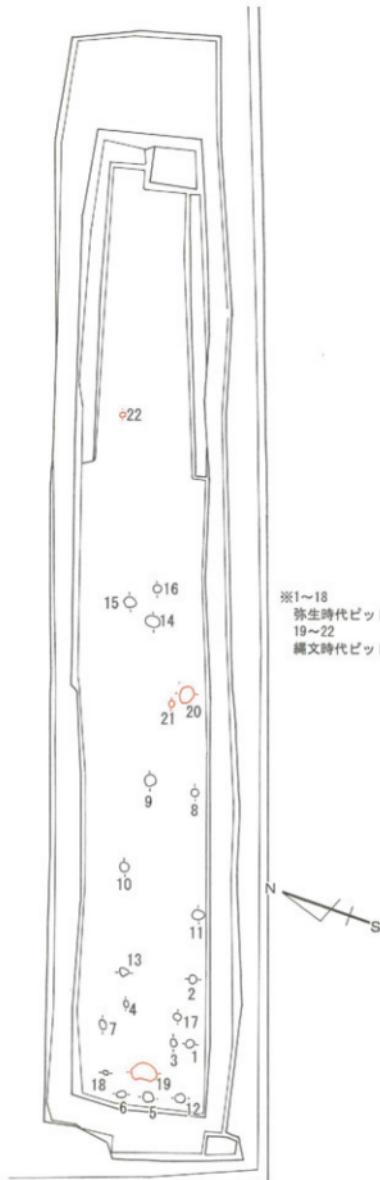
第18層上面で、第13層を埋土とするピットを4基確認した。プランを認識できる並びはこの範囲では確認できなかった。個々のピットの法量については表4の通りである。

表4 縄文時代ピット法量表(cm)

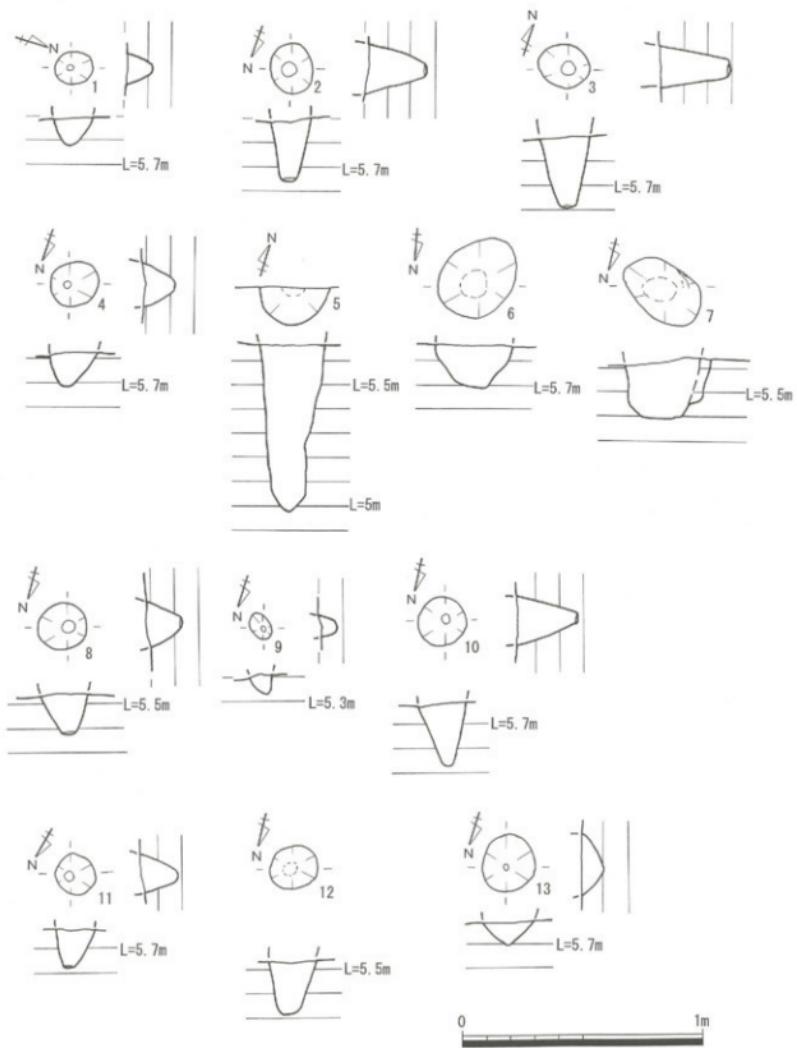
No	長径	短径	深さ
19	55	34	34
20	37+ α	30	15
21	16	14	4
22	14	12	5



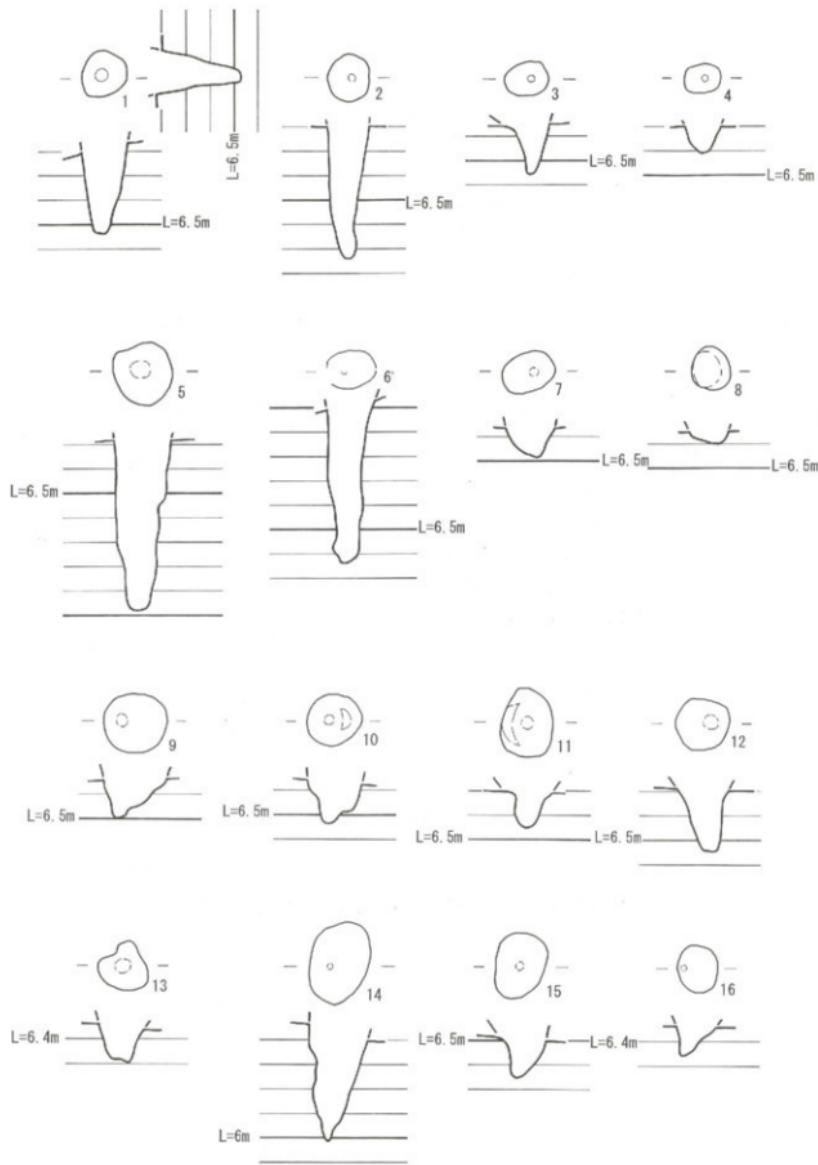
第8図 古墳時代ピット検出状況図 (S=1/100)



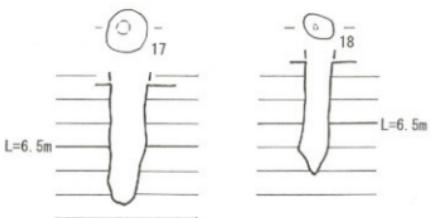
第9図 弥生・縄文時代ピット検出状況図 (S=1/100)



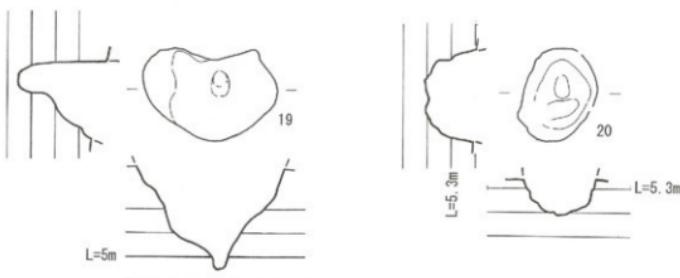
第10図 古墳時代ピット平面図・断面図 (S=1/20)



第11図 弥生・縄文時代ピット平面図・断面図①($S=1/20$)



※ No. 17~18 弥生時代

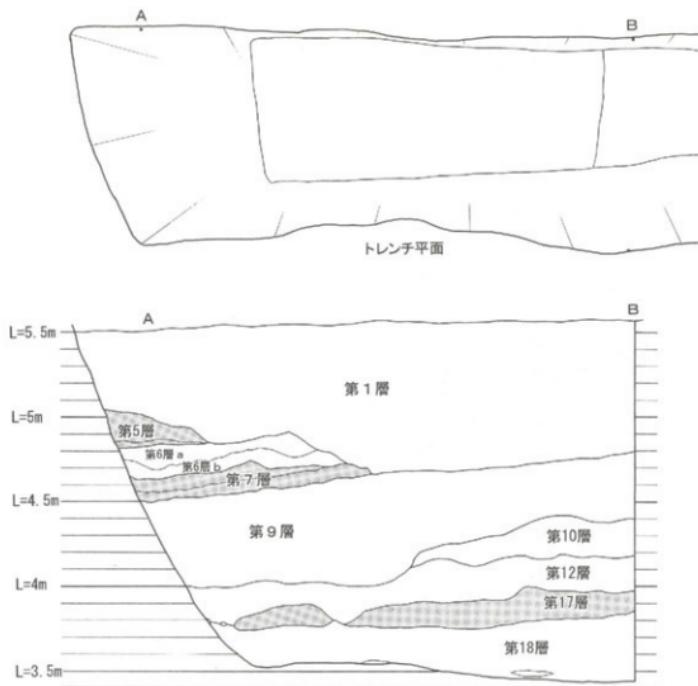


※ No. 19~22 繩文時代

第12図 弥生・繩文時代ピット平面図・断面図②(S=1/20)

第2節 第2トレンチの調査

より海岸に近い地点の地層の堆積状況、遺跡の広がりを確認するために第2トレンチを設定し試掘した。トレンチの西侧では、後世の擾乱が第7層の上面にまで達しており、紫コラ、青コラは既に除去されていた。遺構・遺物ともに見られなかった。

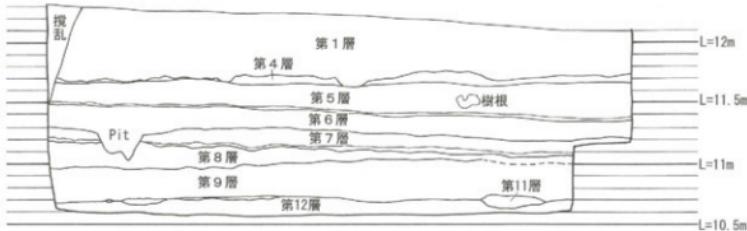


第13図 2トレンチ平面図・北壁層位断面図($S=1/20$)

第3節 第3トレンチの調査

(1) 層位

丹波校上通線と大六・摺ヶ浜線の交差点付近に $1.5 \times 5\text{ m}$ の第3トレンチを設け調査を実施した。第1層、第4層～第9層、第11層、第12層の9層を確認した。いずれもほぼ水平に堆積している。第4層の上面は現代の耕作によって上面が削平され、本来の層厚を保っていない。第7層の下部には5～10cm前後のスコリアが堆積している。後述するピット群以外に遺構は検出されなかった。



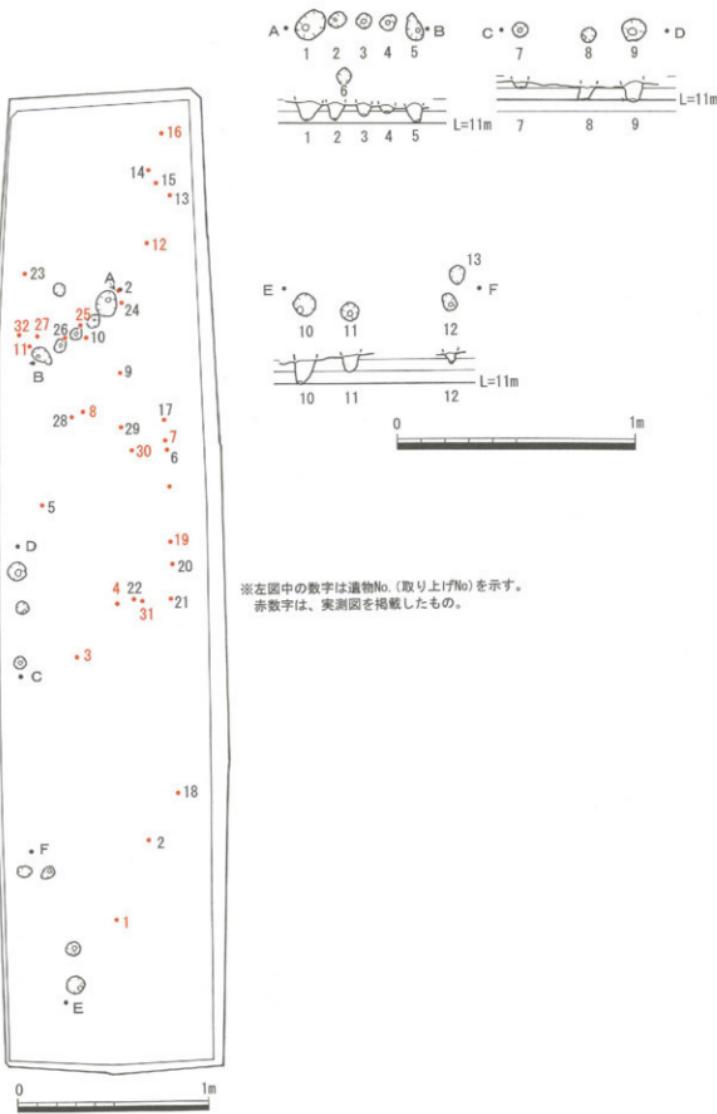
第14図 3トレンチ北壁層位断面図 ($S=1/20$)



南壁の層位

(2) 奈良～平安時代のピット群

第7層上面で、第6層を埋土とするピット群を確認した。比較的近い位置で検出されたものを便宜的にまとまりとしてとらえると3群に分けられる。ピットはいずれも直径5cm程度で、検出面からの深さは10cm前後を測る。先端は尖底状を呈す。密に杭を打ち込んだ痕跡と考えられる。A群のものは5基が近接して並ぶが、他のものは、間隔がばらばらである。



※左図中の数字は遺物No. (取り上げNo.)を示す。
赤数字は、実測図を掲載したもの。

第15図 奈良～平安時代ピット検出状況図・平面及び断面図 (S=1/100, 1/20)

第4節 遺物

第1トレーナー、及び第3トレーナーの出土遺物について報告する。各トレーナーの遺物分布状況は、第15図、第16図の通りである。

第1トレーナーからは、第7層より226点、第12層より1点の遺物が出土し、うち胸部破片や細片を除く、24点を図化し掲載した（No.1～21、35、36、37）。

第3トレーナーからは、第7層より32点の遺物が出土し、うち胸部破片や細片を除く、14点を図化し掲載した（No.22～34、38）。

（1）第1トレーナー出土の土器

No.1は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部端部の断面形態は、台形を帯びる。口縁部はやや立ちあがり、内面に稜をもつ。

No.2は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面形態は、台形を呈し、口唇端部が窪む。口縁部はやや立ちあがり、内面に稜をもつ。

No.3は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面形態は、台形を呈し、口唇端部が窪む。口縁部はぐの字に屈曲し、口唇端部が窪む。内面に稜をもつ。

No.4は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部がぐの字に屈曲し、口唇端部が窪む。内面に稜をもつ。

No.5は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面形態は、台形を呈し、口唇端部が窪む。内面に稜をもつ。

No.6は、壺形土器の口縁部の破片である。口唇部の断面形態は、丸みを帯びる。口縁部は、外反し、内面に稜をもつ。

No.7は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部は、緩やかに外反し、内面に稜をもたない。外面にはハケメの痕跡が残る。

No.8は、壺形土器の口縁部～胸部の破片である。口縁部は、外反し、内面に稜をもつ。

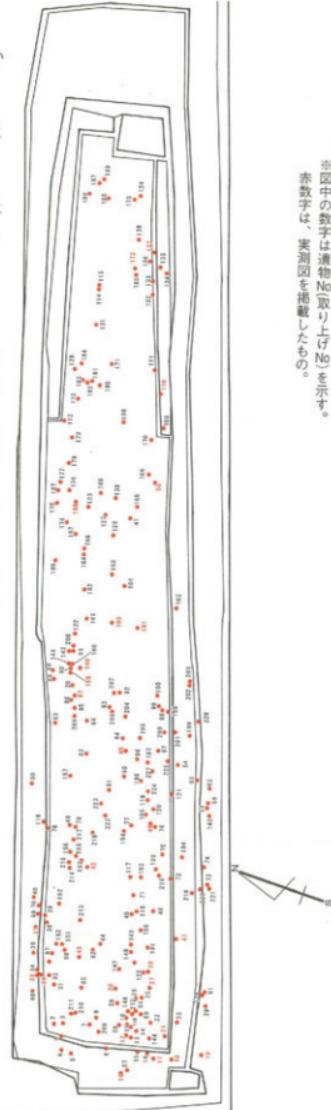
No.9は、壺形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面形態は、先端が尖るようになり、ほぼ直立する。

No.10は、壺形土器の突帶部の破片である。断面三角形の突帶が貼り付けられている。内面にはユビオサエの痕跡が残る。

No.11は、壺形土器の突帶部の破片である。断面三角形の突帶が貼り付けられ、ヘラ状工具によるキザミが施される。

No.12は、壺形土器の底部の破片である。底径は、7.4cmを計る。底部は平底でいわゆる「充実した脚台」

※図中の数字は遺物No取り上げNo)を示す。
赤数字は、実測図を掲載したもの。



第16図 遺物分布状況図 (S=1/100)

といわれるものである¹⁶。

No. 13は、壺形土器の底部の破片である。底径は、9.1cmを計る。底部は上げ底である。外面にハケメの痕跡が残る。

No. 14は、壺形土器の底部の破片である。底部は上げ底である。

No. 15は、壺形土器の口縁部の破片である。二重口縁を呈す。

No. 16は、壺形土器の口縁部の破片である。口唇部は外下がりに仕上げられ、ヘラ状工具によるキザミが「ハ」の字上に施されている。

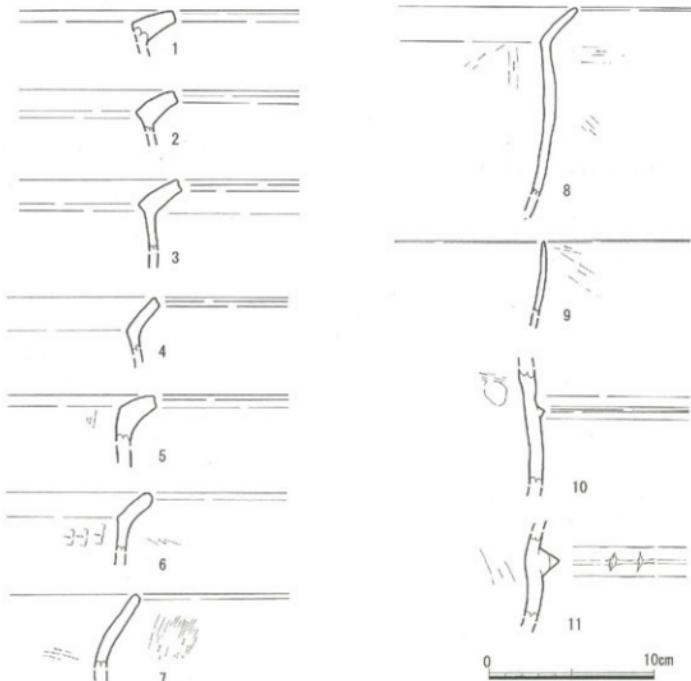
No. 17は、壺形土器の胴部突帯部の破片である。残存する破片の外面には2条の突帯がめぐる。突帯の断面はつぶれて台形を呈す。

No. 18は、壺形土器の胴部突帯部の破片である。外面には3条の三角突帯がめぐる。

No. 19は、壺形土器の肩部突帯部の破片である。外面には4条の三角突帯がめぐる。

No. 20は、壺形土器の底部～胴部の破片である。底径は7.1cmを計る。

No. 21は、壺形土器の口縁部の破片である。口唇部は若干外下がりに仕上げられ、口縁部の断面形状は三角形を呈す。



※ 1～11は第1トレンチ出土

第17図 出土遺物実測図①(S=1/3)

(2) 第3トレンチ出土の土器

No. 22は、甕形土器の口縁部の破片である。口縁部端部の断面形態は、三角形を帯びる。口縁部は水平に仕上げられている。口唇端部がわずかに窪み、内面に稜をもつ。

No. 23は、甕形土器の口縁部の破片である。口縁部端部の断面形態は、丸みを帯びる。口縁部はほぼ水平に仕上げられている。内外面に稜をもつ。

No. 24は、甕形土器の口縁部の破片である。口縁部の断面形態は、先端が尖るようになる。口縁部は外反し、内面に稜をもつ。

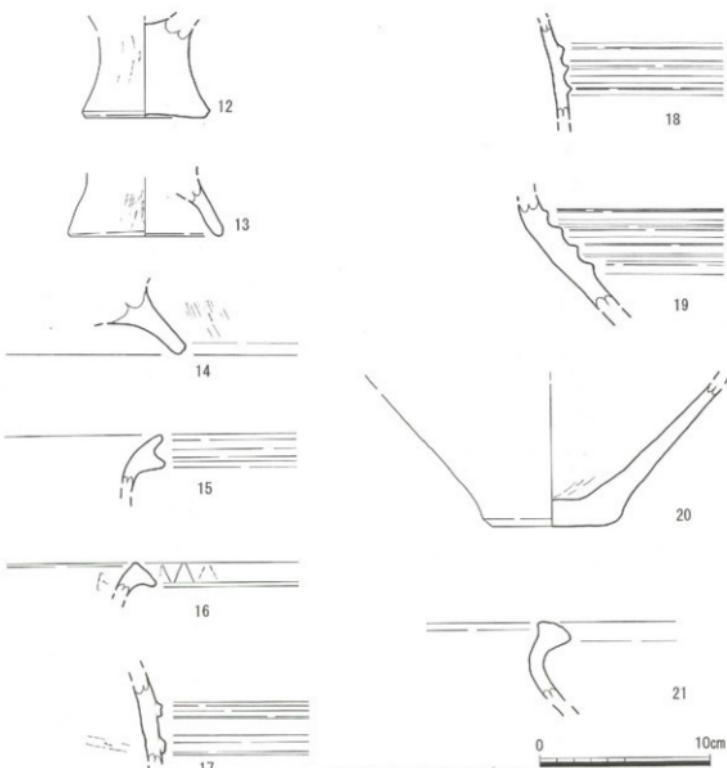
No. 25は、甕形土器の口縁部の破片である。口縁部が緩やかに外反し、内面に稜をもつ。

No. 26は、壺形土器の口縁部の破片である。口唇端部は丸みを帯びる。内面に稜をもつ。

No. 27は、壺形土器の口縁部の破片である。口唇端部は先端がやや尖るように仕上げられている。内面に稜をもつ。

No. 28は、甕形土器の口縁部の破片である。口縁部は、緩やかに外反し、内面に稜をもたない。

No. 29は、鉢あるいは壺形土器の底部の破片である。外面にユビオサエの痕跡が残る。



※ 12~21は第1トレンチ出土

第18図 出土遺物実測図②(S=1/3)

No. 30は、壺形土器の底部の破片である。上げ底で、外面にはハケメの痕跡が残る。

No. 31は、壺形土器の口縁部の破片である。やや外下がりに仕上げられ口唇上面は櫛状の工具でナデられており細かな凹凸が見られる。

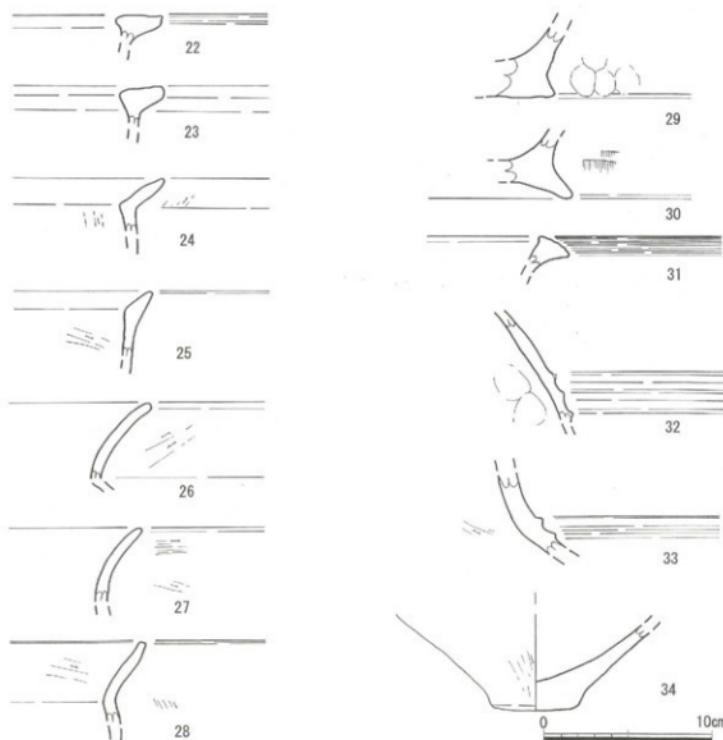
No. 32は、壺形土器の胴部突帯部の破片である。外面には3条の三角突帯がめぐる。内面にユビオサエの痕跡が残る。

No. 33は、壺形土器の肩部突帯部の破片である。残存する破片の外面には2条の突帯がめぐる。

No. 34は、壺形土器の底部～胴部の破片である。底径は5.2cmを計る。

(3) 第1トレンチ出土の石器

No. 35は、軽石製加工品である。軽石製加工品は平面が舟形を呈するもので、その一端に胴部から頸部の屈曲部を削りだして頭部を表現したような加工が施されている。背部はほぼ直線的に仕上げられているが、側面と腹部断面はやや丸みを帯びる。腹に当たる胴部裏面の中央には、直径1cm、深さ約8mmの凹みが施されている。

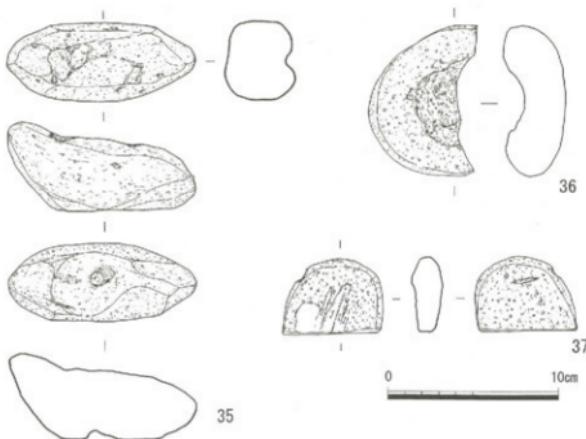


※ 22～34は第3トレンチ出土

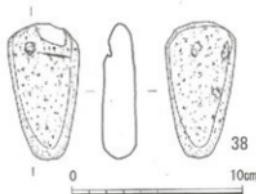
第19図 出土遺物実測図③(S=1/3)

No. 36は、軽石製加工品である。楕円形の石の中央を抉り凹石のような形態をなす。半分が欠損している。

No. 37は、軽石製加工品である。扁平な石の両面を磨っている。片面には4条のキザミの痕跡が残る。



第20図 出土遺物実測図④(S=1/3)



第21図 出土遺物実測図⑤(S=1/3)

表5 遺物観察表1

番号	出土位置	基種	保存状況(cm)	剖面	色	外	色	内	色	角	色	底	基上部	裏わ羽	四輪	その他	層位	総合
1	108	礫岩土器 (新生)	破片	口縫部	7.5YR5/3	5YR5/1	7.5YR4/1							カ・セ・ 白・黒	内・工具によるナデ のちナデ 外・工具によるナデ のちナデ 口唇・ヨコナデ	良好 様なギ モン	9	
2	110	礫岩土器 (新生)	破片	口縫部	5YR6/6 5YR5/1	5YR6/6 5YR5/1	10YR5/2							カ・セ・ 白・黒	内・工具によるナデ のちナデ 外・工具によるナデ のちナデ 口唇・ヨコナデ	良好 様なギ モン	9	
3	163	礫岩土器 (新生)	破片	口縫部	2.5YR5/1 5YR5/4	7.5YR7/4 2.5YR4/1	5YR5/1							カ・セ・ 白・黒	内・工具によるナデ のちナデ 外・工具によるナデ のちナデ 口唇・ヨコナデ	良好 様なギ モン	9	
4	87	礫岩土器 (新生)	破片	口縫部	5YR5/6 2.5YR5/2	5YR5/6	7.5YR7/6							カ・セ・ 白・黒	内・工具によるナデ のちナデ 外・工具によるナデ のちナデ 口唇・ヨコナデ	良好 様なギ モン	9	
5	28	礫岩土器 (新生)	破片	口縫部	N4/0 10YR7/2	34/0 10YR7/2	34/0							カ・セ・ 白・黒	内・工具によるナデ のちナデ 外・工具によるナデ のちナデ 口唇・ヨコナデ	良好 様なギ モン	9	

表6 遺物観察表2

図名	取上げ方	断面	西作法量(cm)	鉛色	外色	内色	肉色	赤	黒	紺上粒	圓角頭	網状	その他の	層位	検査
6	43	塊形土器 (再生)	破片	口縁部	7.598/1	10Y27/4	7.5Y5/1			無砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・金黄	内・工具によるナゲ	良好	9	
					2.598/1	5Y6/1	10Y5/3				のちナゲ	のナゲ			
											外・工具によるナゲ	銀引き			
											のナゲ	モン			
7	17	塊形土器 (再生)	破片	口縁部	10Y3/1	2.5Y6/6	2.5Y7/6			細砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・金	内・工具によるナゲ	良好	9	1313
											のちナゲ	銀引き			
											外・ハゲメのナゲ	モン			
											口唇・ヨコナゲ				
8	47	塊形土器 (再生)	破片	口縁部 ～側部	5Y6/2	7.5Y2/6	10Y2/4			細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	内・工具によるナゲ	良好	9	
					10Y3/4	5Y6/1					のちナゲ	銀引き			
											外・工具によるナゲ	モン			
											のナゲ				
9	48	塊形土器 (再生)	破片	口縁部	2.5Y6/2	5Y6/1	10Y6/3			細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	内・工具によるナゲ	良好	9	
											のちナゲ	銀引き			
											外・工具によるナゲ	モン			
											のちナゲ				
10	19	塊形土器 (再生)	破片	突起部	2.5Y5/2	2.5Y3/1	2.5Y3/1			細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	内・エビササギのちナゲ	良好	9	
											、工具によるナゲ	銀引き			
											のちナゲ	モン			
											口唇・ヨコナゲ				
11	159	塊形土器 (再生)	破片	突起部	2.5Y7/8	10Y7/6	7.5Y7/6			砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒	内・エビササギのちナゲ	良好	9	
						7.5Y7/6					、工具によるナゲ	銀引き			
											のちナゲ	モン			
											口唇・ヨコナゲのちナゲ				
12	96	塊形土器 (再生)	破片	底部 1/3残存 底径8.4cm	底部	5Y6/6	5Y5/1	2.5Y5/6	底	砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒	内・ナゲ	良好	9	
						2.5Y5/2			7.5Y5/4	細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	外・工具によるナゲ			
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	のちナゲ			
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	底・ナゲ			
13	42	塊形土器 (再生)	破片	底部 2/5残存 底径9.1cm	底部	2.5Y5/6	2.5Y1/2	2.5Y2/1	脚内 2.5Y5/4	細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	内・ハゲメのちナゲ	良好	9	69
						10Y6/5		2.5Y6/5	2.5Y6/2	細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	脚内・工具によるナゲ	良好		108
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	ハケメ			
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	のちナゲ			
14	27	塊形土器 (再生)	破片	底部	2.5Y5/3	—	5Y5/2	脚内 5Y5/1		細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	脚内・ナゲ	良好	9	
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	ハケメ			
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	脚内・ナゲ			
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	ハケメ			
15	101	塊形土器 (再生)	破片	口縁部	34/0	NA/0	NA/0			砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒	内・工具によるナゲ	良好	9	
					10Y3/2	10Y3/2				細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	のちナゲ	銀引き		
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	外・工具によるナゲ	モン		
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	のちナゲ			
16	20	塊形土器 (再生)	破片	口縁部	5Y6/6	5Y6/6	5Y4/1			砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒・金黄	内・工具によるナゲ	良好	9	
					10Y3/4					細砂粒を含む	カ・セ・白・黒・金黄	のちナゲ	銀引き		
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒・金黄	外・工具によるナゲ	モン		
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒・金黄	のちナゲ			
17	21	塊形土器 (再生)	破片	口縁部	7.5Y7/4	N4/0	SP6/1			細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	内・工具によるナゲ	良好	108	265
					2.5Y4/1					細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	のちナゲ	銀引き		
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	外・工具によるナゲ	モン		
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	のちナゲ			
18	33	塊形土器 (再生)	破片	突起部	10Y8/4	10Y6/3	2.5Y5/1			細砂粒を若干含む	カ・セ・白・黒	内・工具によるナゲ	良好	9	
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	のちナゲ	銀引き		
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	外・工具によるナゲ	モン		
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	のちナゲ			
19	66	塊形土器 (再生)	破片	突起部	5Y5/1	7.5Y6/4	2.5Y5/2			細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	内・ナゲ	良好	9	106
					2.5Y4/1					細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	のちナゲ	銀引き		
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	外・ナゲ	モン		
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	のちナゲ			
20	35	塊形土器 (再生)	破片	突起部	10Y7/4	5Y5/2	7.5Y4/1			細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	内・工具によるナゲ	良好		
					NE/0					細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	のちナゲ	銀引き		
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	外・工具によるナゲ	モン		
										細砂粒を含む	カ・セ・白・黒	のちナゲ			
21	140	塊形土器 (再生)	破片	底部 3/4残存 底径7.1cm	底部	5Y7/6	10Y6/4	7.5Y5/3	底 10Y7/3	砂粒含む	カ・セ・白・黒	内・工具によるナゲ	良好	9	88
										砂粒含む	カ・セ・白・黒	のちナゲ	反転		165
										砂粒含む	カ・セ・白・黒	外・工具によるナゲ	モン		
										砂粒含む	カ・セ・白・黒	のちナゲ			

表7 遺物観察表3

図No.	出土位置No.	器種	形状	外色	内色	内色	外色	地土粒	基面斜	調査	その他	層位	混合
22	234	施耐土器 (乳生)	破片	口縁部	2.5TB6/6	10TB6/2	7.5TB4/1	細砂粒を含む 微砂粒を含む	カ・セ・ 白・黒	内・工具によるナデ のちナデ 外・工具によるナデ のちナデ 口唇・ヨコナデ	良好 紙引き セン	9	
23	8	施耐土器 (乳生)	破片	口縁部	5TB6/6	5TB6/6	7.5TB3/1	細砂粒を含む 微砂粒を含む	カ・セ・ 白・黒	内・工具によるナデ のちナデ 外・工具によるナデ のちナデ ヨコナデ 口唇・工具によるナ デのちナデ	良好	9	
24	1	施耐土器 (乳生)	破片	口縁部	5TB6/6	7.5TB2/4	7.5TB2/4	細砂粒を含む 微砂粒を含む	カ・セ・ 白・黒	内・工具によるナデ のちナデ 外・工具によるナデ のちナデ ヨコナデ 口唇・工具によるナ デのちナデ	良好 紙引き モン	9	
25	25	施耐土器 (乳生)	破片	口縁部	7.5TB6/3	7.5TB6/3	10TB4/2	細砂粒を若干含む 微砂粒を若干含む	カ・セ・ 白・黒	内・工具によるナデ のちナデ 外・工具によるナデ のちナデ ヨコナデ	良好 紙引き モン	9	
26	16	施耐土器 (古生)	破片	口縁部	10TB5/8	10TB5/8	10TB5/6	細砂粒を含む 微砂粒を含む	カ・セ・ 白・黒	内・工具によるナデ のちナデ 外・工具によるナデ のちナデ ヨコナデ	良好	9	
27	3	施耐土器 (古生)	破片	口縁部	10TB3/1	7.5TB7/6	7.5TB4/1	細砂粒を含む 微砂粒を含む	カ・セ・ 黒	内・工具によるナデ のちナデ 外・工具によるナデ のちナデ ヨコナデ	良好 紙引き モン	9	
28	30	施耐土器 (乳生)	破片	口縁部	10TB4/1	5TB8/4	5TB4/1	砂粒を若干含む 細砂粒を含む 微砂粒を含む	カ・セ・ 白・黒	内・工具によるナデ のちナデ 外・工具によるナデ のちナデ ヨコナデ	良好 紙引き モン	9	29
29	4	Hor 施耐土器 (乳生)	破片	底部	2.5TB7/8	7.5TB8/6	5TB6/6	底 細砂粒を含む 微砂粒を含む	カ・セ・ 白・黒	内・工具によるナデ のちナデ 外・ツバビ オサエ 底・ナデ	良好	9	
30	7	Hor 施耐土器 (古生)	破片	底部	2.5TB6/6	7.5TB7/6	2.5TB6/6	細砂粒を含む 微砂粒を含む	カ・白・ 黒	内・ナデ 外・ハケメのちナデ ハケメ 底・ハケメのらナデ 水/cm	良好	9	
31	12	施耐土器 (乳生)	破片	口縁部	5TB6/6	5TB8/4	7.5TB6/6	細砂粒を含む 微砂粒を含む	カ・白・ 黒	内・ナデ 外・ツバビ 口唇・工 具によるナ デのちナデ ヨコナデ	良好	9	
32	MT2 32	施耐土器 (乳生)	破片	突起部	5TB6/6	5TB6/6	10TB4/2	細砂粒を含む 微砂粒を含む	カ・セ・ 白・黒	内・ユビオサエのち ナデ 外・ナデ ヨコナデ ヨ・マツメ	良好 紙引き モン	9	
33	MT2 19	施耐土器 (乳生)	破片	突起部	10TB3/1	7.5TB7/6	7.5TB4/1	細砂粒を含む 微砂粒を含む	カ・白・ 黒	内・工具によるナデ のちナデ 外・工具によるナデ のちナデ ヨコナデ	良好 紙引き モン	9	
34	MT2 27	施耐土器 (古生)	破片	底部 1/2程度 後元直径5.2cm	2.5TB6/6	10TB7/2	7.5TB3/1	底 砂粒を若干含む 細砂粒を含む	カ・セ・ 白・黒	内・ナデ 外・工具によるナデ のちナデ ヨコナデ	良好	9	
35	MT1 12	軽石製加 工品	長・11.2cm 幅・4.6cm 厚・4.2cm										9
36	137	軽石製加 工品	長・8.7cm 幅・5.4cm 厚・3.2cm										9
37	MT2 11	軽石製加 工品	長・8cm 幅・4.1cm 厚・2cm										9
38	MT2 172	軽石製加 工品	長・4.4cm 幅・6cm 厚・1.8cm										9

第V章　まとめ

今回の調査において、奈良～平安時代、及び古墳時代のピット群が検出され、橋牟礼川遺跡にみられる2時期の集落の広がりが示唆された。調査地点の遺構・遺物の出土状況から、橋牟礼川遺跡の集落の東側縁辺の一端を把握できたものと思われる。

調査地点より北側の字小牟礼地区では昭和27年に多量の遺物が採集されており、丹波小学校校庭からも多量の成川式土器が出土している。橋牟礼川遺跡とは別の集落が存在する可能性は極めて高い。

また、縄文時代後期のピットの存在も確認された。大園原遺跡では、縄文時代後期に該当する土器に、高床建物の可能性がある線刻画が発見されている³⁰。また、近年、西日本においても縄文時代の掘立柱建物跡の事例が増えつつあり興味深い。

また、第1トレンチでは、海拔4～5mのレベルで河川堆積物と考えられる砂層が確認されるなど指宿地方の縄文後期の海進の状況を知る上で興味深い知見を得ることができた。なお、古墳時代以降に国道226号より東側の火山性扇状地の一部が沈降したとの見方もあり³¹、今回の河川堆積層の存在と合わせて、今後、当該地の古地形を推定する手がかりの一つになると考えられる。

遺物では、弥生時代中期から古墳時代の上器片、輕石製加工品等が出土した。橋牟礼川遺跡においても、弥生時代中期の遺物が出土しているが、それに伴う遺構の検出事例は少ない。これについては、古墳時代集落の造営の際、ほとんどのエリアで弥生時代の包含層まで掘削が及んでいることから、その時点では失われた可能性が指摘されている³²。

軽石製加工品では、鳥を模した可能性のある軽石製加工品が出土している（No. 35）。弥生時代にみられる鳥形木製品に比べると頭部の表現が明瞭ではないが、大阪府亀井北遺跡出土の鳥形木製品や福島県天王塙古墳出土の鳥形埴輪に全体的な形状が類似している印象を受けることや腹部に凹みが施されている点も興味深い。今後の類例の増加を期待したい。

【注】

- (1) 国分直一他「指宿地方の新発見の遺跡について」『鹿児民衆第1号』指宿高校郷土研究部1952年
- (2) 『指宿市誌』指宿市役所総務課市誌編纂室1985年
- (3) 『指宿市誌』指宿市役所総務課市誌編纂室1985年
- (4) 『橋牟礼川遺跡V』指宿市教育委員会1993年
- (5) 『指宿市誌』指宿市役所総務課市誌編纂室1985年
- (6) 『指宿市誌』指宿市役所総務課市誌編纂室1985年
- (7) 成尾英仁「橋牟礼川遺跡の地質」『橋牟礼川遺跡III』指宿市教育委員会1993年
- (8) 下山覚の指摘による。
- (9) 土壌硬度測定については、下山覚・樺木幸利・竹元幹夫「橋牟礼川遺跡で出土した古道の土壤硬度試験について」『橋牟礼川遺跡III』指宿市教育委員会1993年に詳しい。
- (10) 『指宿歴史物語－二十世紀の指宿の発展調査史を振り返る－』指宿市教育委員会2002年
- (11) 成尾英仁教示。また、下山覚は、弥次ヶ瀬古墳の発掘調査において、青コラで埋没した古墳の周溝部分で湧水が見られることから、古墳時代以降に沈降した可能性があると指摘する。
- (12) 前掲(8)と同じ。

SUMMARY

Excavation of the Minamitanba archaeological site

The pillar hole groups of the Kofun age are detected in this investigation. It was suggested in a spread of the Kofun age village that it was of a simultaneous period to the Hashimuregawa archaeological site.

In 1995 and 1998, excavation investigation was done at a place located in the south, 300m from the investigation spot with construction .

As a result, the pillar hole groups of the Kofun age and its abundant relics were discovered. We need to confirm the spread of the remains in detail after this. We set one trench in this excavation which was enough to survey for the spread of the site. It is considered that this investigation spot is around the Kofun ago village considering the case of the village structure at the Hashimuregawa site . It is considered that the center of this village exists in the national historical site side, which is in the south, as was expected.

Pit houses which exceed 150 are detected in the survey of the Hashimuregawa archaeological site from 1984 to 1990 with rezoning of the the west Ibusuki-station area. More inspection of the production field spread and the situation of a grave area is necessary for understanding the village maintenance. We think , in order to get the answer to the question, continuation of the survey is needed.

(Original:Satoru Shimoyama Proofreading Nikolai Piper Basalaj)



PL1 遺跡の遠景①(南西方向より)



PL2 遺跡の遠景②(南西方向より)



PL 3 第1トレンチの全景
古墳時代遺物包含層検出状況
海岸に向けて地形が傾斜している。



PL 4 第1トレンチの調査風景
縄文後期の遺物包含層まで掘り下げたが縄文土器の出土は無かった。



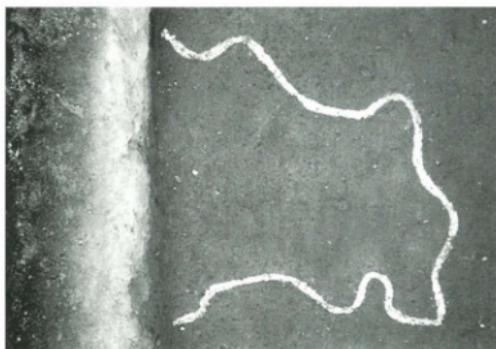
PL 5 第1トレンチの地層①
調査区北壁の状況



PL 6 第1トレンチの地層②
調査区西壁の状況



PL 7 第1トレンチの地層②
試掘トレンチの状況



PL 8 硬化面1の平面検出状況

PL9 硬化面2の平面検出状況



PL10 古墳時代ピット群の平面検出状況



PL11 弥生時代、縄文時代ピット群の平面検出状況



PL12 第3トレンチの位置



PL13 874年3月25日の地表面（紫コラ火山灰直下の状況）



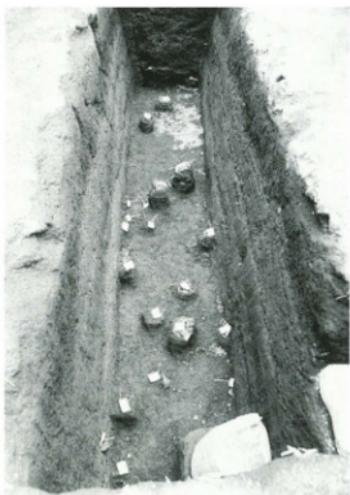
PL14 青コラ上面で検出した奈良～平安時代のピット群



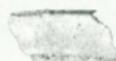
PL15 青コラ上面で検出した奈良
～平安時代のピット群
A-A' の断面の状況



PL16 遺物出土状況
遺物はすべて青コラ直下の古
墳時代の包含層から出土した。



PL17 遺物写真①



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14

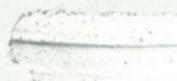


15

PL18 遺物写真②



16



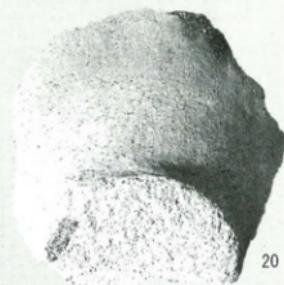
17



18



19



20



21



22



23



24



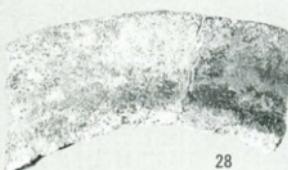
25



26



27



28



29



30



31



32



33



35



34



35



36



37



38

報告書抄録

ふりがな	みなみたんばいせき						
書名	南丹波遺跡						
副書名	緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書						
巻次	1						
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第27集						
編著者名	下山 覚・中摩浩太郎・渡部 徹也・鎌田 洋昭						
編集機関	指宿市教育委員会(指宿市考古博物館 時遊館COCOはしむれ)						
所在地	鹿児島県指宿市十二町2290						
発行年月日	西暦1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
みなみたんば 南丹波遺跡	指宿市十二町	46210	233		1994. 6. 1～ 1994.11.10 1997. 4.11～ 1997. 4.27	135 7.5	道路拡幅工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
南丹波遺跡	集落	奈良～平安 古墳時代 弥生時代 縄文後期	ピット 硬化面 ピット ピット ピット	弥生土器(中期～終末) 成川式土器 軽石製加工品			

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集

南丹波遺跡

平成10年3月

発行 鹿児島県指宿市教育委員会

指宿市十町2424

☎ 0993-22-2111

印刷所 中央印刷株式会社

鹿児島市春日町12番16号

☎ 099-247-3300

